

日鮮両語比較論に関する往復書簡

『長田夏樹論述集（下）』第36章

（原載：『水門一言葉と歴史』第1号，1963年7月）

1949年9月に発表された「原始日本語研究導論—アルタイ比較言語学の前提として—」（『長田夏樹論述集（下）』第6章、原載：『神戸市外大開学記念論文集』）に触れたイェール大学の Johannes Rahder 博士から著者のもとに発信された1952年4月3日付の書信から同年6月25日付書簡に至る都合7通の往復書簡が収められている。往復書簡掲載に至った経緯、この間に長田夏樹「日鮮祖語に於ける母音の音価に就いて」（朝鮮学会報、1952年4月）、この間の時期をまたいで Johannes Rahder “Comparative Treatment of the Japanese Language I” (*Monumenta Nipponica* 日本文化誌叢 Vol. VII, VIII, IX, 1952-1953) が刊行された事実を掲載者蔵中進氏による注記によって知ることが出来る。

第1信 (Rahder→長田) では両氏が別途に同一の結論に達したことを嘉しつつサ行音遊及形の摩擦・破擦の問題が提示されている。第2信 (長→R.) は、古代日本語のⅠ類からⅤ類の別 (Ⅱ類を除く) と中世朝鮮語の声点の別が関係する事実を「ツメ、ミヅ、トリ、クサ、シマ、ウリ、シバ、アサ、ツル、カメ」の例を挙げて述べている。上述「原始導論」同様、この時期の研究では「ト_レリ」は *tárk*, 「ツル」は *turumi*, 「クサ」は *koč* (花) と比較されているのである。第3信 (R.→長) では「原始導論」での *tal*, *t̄ar* と *tuki* (月) の比較に関して、さらに TOKI (時) を関係付けうるかの問が発せられている。第4信 (長→R.) は上述「日鮮母音音価」の梗概を知らせつつ、日朝間の *a:a* (*ač'am:ača*, morning), *a:u* (*tahá:tuku*, to complete, to finish), *a:o* (*pask:poka*, outside), *è:ö* (*èmi:ömö*, mother), *è:u* (*kémui:kumo*, spider), *o:u* (*oi:uri*, melon), *o(u?):u* (*nun:yuki<*duki*, snow), *u:a* (*kut:kata*, hard), *á:ö* (*čámú:čömu*, to soak, to put into water), *ú:u* (*núp lake, pond: numa marsh*), *ú:a* (*kú:ka*, this), *i:i* (*ni load for carrying on head: ni-na-pu to carry*), *i:u* (*kiráma:kura*, saddle) 等の例が挙げられる。第6・7信 (R.→長) では流音を含む consonant cluster の対応例について、第7信では Swadesh を引きつつ「借用」と「同源」の別について言及されている。この時点での長田説はラムステッド以来のいわば正嫡的系統論であった。「借用」、「同源」にならず「主意説」へ移行したその後の長田説を、88年に齢九十をもって長逝された Rahder 博士はどう見たであろうか。 (伊藤英人)